

# 伝文

日本口承文芸学会 会報

【伝文】 第26号 2000年 3月

発行 日本口承文芸学会

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28  
國學院大学文学部 伝承文学研究室内  
☎03-5466-0224

## 昔話語り—地方からの発信

武田 正

「長え長え昔噺、知らへがな。山の中に  
橡の木いっぼんあつたずおん。そのてっべ  
んさ、からす一羽来てとまったずおん。か  
らすあ、があて啼けば、橡のあ、一つぼた  
んて落づるずおん。また、からすあ、があ  
て啼けば、橡の実あ、一つぼたんて落づ  
るずおん・・・。」

太宰治の「雀こ」の冒頭である。この果  
なし話は読者を狂わせたもので、この一事  
をもってしても、昔話が子どもたちへの文  
学的もてなしであることは論を待たない。  
語りの座であった囲炉裏が消え、若者が集  
って笑話を楽しんだ木小屋も見られなくな  
ったことで、昔話語りそのものも途切れが  
ちな中で、「語りを子どもへ」という試み  
が山形県で行なわれた。東北・北海道語り  
フェスティバルがここ三年間、山形市、新  
庄市そして南陽市の「夕鶴の里」で開かれ  
た。立錫の余地もないほどの会場は熱気で  
むんむんするほどだが、「とんと昔あつた  
けずまなあ」と語りが始まると、会場は水  
を打ったように静まり、それが「馬鹿智話」  
であったから、たちまち割れるような笑い  
に変わった。北海道からは澤井アクさんの  
「カムイユウカラ」、遠野からも菊地玉さ  
んの「話の上手な馬喰」が出た。地元から  
は新しいメディアによる山形の吉四六話で

もある「佐兵ばなし」が寸劇で演ぜられ、  
紙芝居民話も披露された。

これほど「語り」に飢えていたのかという  
実感があったと言うのは言い過ぎだろうか  
と思ったほどであった。それと同時に、民  
俗社会の中で昔話語りがどう生き、どう  
いう役割を果たしていたのかを、明らかにす  
ると共に、どう伝承されてきたかを明確にす  
ることこそ私共研究者の大きな仕事なのだ  
と痛感した次第である。そして伝承を支え  
たのは、昔話のモチーフなり、話型への興  
味ももちろんだが、語り手の声であり、パ  
フォーマンスといった身体性の問題である  
上に、聞き手とのかかわりも解明を待つ一  
つなのではないだろうか。

特筆したいのは、小学校の子どもによる  
語りで、「長い名の子」の、大人では憶え  
ることのむずかしいジュゲムをたちまち自  
分のものにしての語りで、子どもの語呂合  
せの秀才ぶりに舌を巻いたものである。今  
社会に求められている「いやし」がこんな  
所にあったと思ったものである。各地で見  
られるイベントに昔話の語りがよく見られ  
るが、日常生活の中の語りがどういう状況  
か、どんな意味があるのかを現実に即して  
考究するのも私どもの仕事の一つと思っ  
た次第である。

日本口承文芸学会 第39回 研究例会

平成12年3月11日(土) 國學院大学常磐松2号館 中講堂にて開催

昨年12月の通知に記載された会場が変更となりました。詳しくは  
4頁の案内を御覧下さい。

○昨年末に荒木博之氏が、今年2月に宮田登氏が逝去されました。お二人を偲びそれぞれにご交友の深かった方に追悼文を寄せていただきました。

## 20世紀を駆け抜けた人

—荒木博之さんを悼む—

山下 欣一

荒木博之さんは、アメリカ、インディアナ大学で民俗学を専攻した研究者で、日本の民間説話研究に独特の視角から数多くの知見を明らかにした人であった。荒木さんの『甌島の昔話』（昔話研究資料叢書）は1975年の刊行であるが、この「解説」で、アアルネやワルター、アンダーソンの昔話の伝承の不思議な安定性についての理論を援用して、その検証を試み、そして、また、AT560「魔法の指輪」、いわゆる「犬と猫の指輪」の歴史地理的方法による資料の整理とその検討を提示したのである。インディアナ大学のS・トンプソンの『民間説話』を石原綏代氏と共訳し刊行もしている。さらには、アラン・ダンデス、シドウなど理論的研究の訳を編纂し『フォークロアの理論』として1994年に刊行している。その副題の「歴史地理的方法を越えて」に象徴されているように、いわゆる欧米の研究に対する関心が深く、その紹介もまた、果敢に試みた人でもあった。荒木さんはこの他の論文を発表し、学界に刺激を与えつづけたのは周知の如である。説話を研究対象にしたために「ことば」に関心が深く、日本語を通じての日本人の行動様式に着目し、遂には、農耕民と海洋民の差という原理を抽出し、多くの著作を公刊した。また薩摩盲僧に関心を持ち、その調査は九州、山口から韓国に及び、ホメロース、アルバート、ロードの研究との関連を含めた多くの論文もある。荒木さんは立ち止まることのない人で、自己を敢然といつでも、どこでも主張した人でもあった。それにしても1976年韓国、江原道江陵の関東大学のシンポジウムに参加した時、臼田甚五郎、直江廣治、大林太良、野村純一の諸氏とともに荒木さんや小生なども参加して、日本口承文芸学会創立を話し合ったのは昨日のようである。荒木博之さんの75年の生涯は短いものでなかったが、残した仕事は山ほどあったと思う。今はただ、20世紀を駆け抜けた荒木さんのご冥福を祈るのみである。

## 宮田登を悼む

小澤 俊夫

宮田さん、どうしてこんなに早く逝ってしまったんですか。ぼくがあなたを追悼するなんて考えもしなかった。6歳も年上のぼくが。しかもこんなに早く。まだまだ話することがたくさんあったじゃないか。

昨年暮れ、いつもの声で電話をくれたね。今度は外科的手術だったので、なかなか体力が回復しない、新年からの白百合女子大大学院の授業ができないかもしれないという電話だった。ぼくは、授業のことは心配しなくていいから病気をなおしてくれと言った。あれが、あなたの声を聞いた最後になるとは。

宮田さん、あなたの学問は実に広がった。民俗学、文化人類学、歴史学、経済学。いつのまにこんなに勉強したんだろうと、話を聞くたびに感嘆していた。最後には都市民俗学を拓こうと、さまざまな試みをしていた。妖怪についての傾倒も瞠目させるものがあった。あなたが来る度に、白百合女子大には妖怪がついてくる感じだった。

日本口承文芸学会創立に当っては、民俗学会との橋渡しもして、大きな力になってくれた。何年にもわたって理事をつとめた。忙しいのによく理事会に出席してくれるものだと、いつもありがたく思っていたよ。日本口承文芸学会にとって大きなサポートだった。

宮田さん、あなたはいつも軽妙な、冗談とも本気ともつかぬ話で、一座の人びとをなごませてくれた。煙に巻いたとさえ言えるだろう。あなたがそこに居るだけで、どれ程みんなの心がなごんだことか。それはあなたの天与の魅力だった。誰もあなたに代ることはできない。

筑波大学でも、いろいろな局面でぼくを支えてくれたね。あなたに会うとホッとしたものだ。もう会えないと思うと、本当にさみしい。

宮田さん、あなたはいつも若い研究者に心を配っていた。これからは彼らが、あなたの面影と声を心に刻み込んで、学問を究めていくと思う。見守ってやって下さい。

合掌

日本口承文芸学会

第 3 8 回 研究例会

報告 大島 広志

1999年秋の研究例会は10月16日(土)に東京の國學院大学で行なわれた。内容は次の通り。

シンポジウム

口承文芸の未来

—どのように継承されるべきなのか—

問題提起

- 1 伝統的な語り(その1)  
花部英雄(國學院大学)
- 2 伝統的な語り(その2)  
川森博司(大阪大学)
- 3 現代の民話  
米屋陽一(國學院大学)
- 4 ストーリー・テリング  
藤野時代(語り手たちの会)
- 5 作業歌など  
岩井正浩(神戸大学)

司会 川田順造(広島市立大学)

口承文芸が危機に瀕しているという認識に立つこのシンポジウムにおいて、まず花部氏は、昔話のかつての伝承形態と現在の伝承形態を比較し、何のために語るのかという点で、家の継承・村のアイデンティティーが現在は失われていると指摘した。そして、青森県中津軽郡西目屋村の語り手三上ヤエさんの例をあげて、昔話の伝承が家族内では困難な状況にあることを説明し、三上さんの語りは途切れる運命にあると述べた。他の語り手も同様であろうから、伝承的な語りの継承は危うい状況にあり、いずれ消滅するだろうという。したがって、昔話はもっと別な形で引き継いでゆく必要があると述べた。

川森氏は、〈語り手の実践への視点〉として、時代経過と共に信仰に支えられた昔話は笑話化していったという柳田國男の考え(「採集期の問題」)を、特定

の時代状況における語り手の「主体的な選択」として読み替えることはできないかと問題提起。また昔話継承という点については、囲炉裏の語りの場の復活は不可能だが、伝統的な昔話の内容は中高年の生き方のモデルを提示する役割を持っていると述べた。

米屋氏は、現代の民話の具体例を紹介した後、「人びとは日常生活の中の特殊な体験を通してハナシを発生させる。そのハナシは伝承民話や文学作品などと交流しながら現代民話として生成してゆく。その場合、ストーリー性、文芸性、口承性、地域性、虚構性、同時代性、普遍性の試練を経るか経ないかによって現代民話は伝説化や昔話化し、あるいは消滅の道を進む(レジュメの要約)」と述べた。

藤野氏は、地域で子どもや大人に昔話を語っている語り手として発言。子どもたちへの継承は可能かという問いかけから、都市で語る語り手(ストーリーテラー)が現在どのように語りを学び、実践しているかを報告した。近年は語り手養成のための講座が各地で開かれているという。また、今日、語り手は単に本を覚えて語るのではなく、自分の語り口を作り上げ、伝統に学びながら現代に機能する新しい語りを模索する活動をしているとも述べた。

岩井氏は、作業歌に限らず、民謡、祭り、行事などは、生活基盤の崩壊により大きく変化したといい、1960年代からの高度経済成長期が伝統の消滅に関わっているとし、このような中で現代をどうとらえるかが課題であると述べた。

「口承文芸の未来—どのように継承されるべきか—」をテーマとしたシンポジウムは、学会が社会の現状と向き合うという面で画期的な意義ある研究例会であった。秋田県羽後町「昔がたり館」、山形県新庄市「新庄民話の会」、山形県南陽市「夕鶴の里」他、全国各地で模索しながら継承を実践している例は多い。継承の問題は実践をとらなければ実りが少ないのだから、今後は研究者が実践者とともに深めてゆく必要があるだろう。

---

## 受贈書リスト

---

- ・「国際日本文学研究集会会議録」第22回 国文学研究資料館 1999.10
- ・「同志社国文学」第51号 同志社大学国文学会 2000.1
- ・「国立歴史民俗博物館研究報告」第79号 国立歴史民俗博物館 1999.3
- ・「国立歴史民俗博物館研究年報」7 1998年 国立歴史民俗博物館 1999.10
- ・「平成10年度 八重九郎の伝承(7)」(アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズXVII) 北海道教育庁生涯学習部文化課編 北海道教育委員会 1999.3
- ・「話はめぐるー聞き手から語り手へー子どもと大人のためのストーリーテリング」 佐藤涼子 リブリオ出版 1999.11
- ・「日本民話の会通信」No.145~147 日本民話の会 1999.9~2000.1
- ・「白い国の詩」1999年12月~2000年1月号 東北電力(株)地域交流部 創童社
- ・「アイヌ語静内方言文脈つき語彙集」(CD-ROM付き) 奥田統己編 札幌学院大学 1999.3
- ・「日本民俗学」第218・219号 日本民俗学会 1999.8/11
- ・「アイヌ民族博物館だより」No.40~42 アイヌ民族博物館 1998.12~1999.7

---

### 日本口承文芸学会第39回 研究例会のお知らせ

昨年12月の通知と、開催会議場が異なりました。右を御覧になって、お間違いのないようご来場下さい。

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求下さい。

入会金 1000円 年会費 4000円

入会申込書請求先：☎150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

國學院大学文学部伝承文学研究室(野村教授)内

日本口承文芸学会事務局 ☎03-5466-0224

送金先：[郵便振替] 00180-4-44834

The Society for Folk-Narrative Research of Japan

c/o Prof. J. Nomura, Kokugakuin University,

4-10-28, Higashi Shibuya-ku, Tokyo, 〒150-8440, Japan

口承文芸に関心のある方を広くご紹介下さい

---

## 事務局報告

---

※平成12年3月11日 午後2~5時

※國學院大学(東京都渋谷区東4-10-28)  
常磐松2号館 2階 中講堂(前通知と変更しました)

シンポジウム

「現代における口承文芸の条件  
ーユーラシアのフィールドからー」

報告者 村上 明(モンゴル)  
斉藤君子(ロシア)  
坂井弘紀(中央アジア)  
山下宗久(ヤクーチャ)

司 会 荻原真子

※会場へはJR渋谷東口から、都バス「日赤医療センター行」に乗車、「國學院大学」で下車が便利です。会場付近に案内板を出しますので、御覧下さい。

☆編集担当は、大島広志・磯沼重治・中村とも子です。